



メロンソーダ・ガール

橋本コウ

メロンソーダって、よく聞くジュースではあるけれど、実際に飲める機会はそうそうないものだ。クリームソーダになると、喫茶店とかレストランで飲めるけど、クリームソーダはメロンソーダとは違う。あれにはアイスが入っている。アイスを先に食べれば良いというわけでもない。溶けたアイスが混じって、ちょっと違う味になるからだ。

むかし、某有名ジュースFにメロン味があって、僕はそれがすごく好きだったのに、いつの間になくなっていった。チャンスロスになってもったいないと思うけれど、きっと世の中のニーズはそれほどでもないのだろう。一体どれだけメロンソーダを好きな人がいるかは調べようがないから残念だ。

いま、メロンソーダを飲むためにはファミレスのドリンクバーという手もある。あれはなかなか便利なシステムだと思う。時間制限はほとんどなく、友達と話し合ったり勉強したりするには最適なサービスである。僕の地元にはサラダバーという、ドリンクバーと同じようなサービスを提供しているファミレスもあるが、これはもっとお得だからオススメだ。長く楽しむコツは、ポテトサラダは食べないこと。あれを食べると、早い段階で満腹感を得られてしまうから、やってはいけない食べ方だ。どこにでもあるサービスではないが、見つけたらぜひ挑戦してほしい。

じつは夜のお店にもメロンソーダがある。仄暗く、きらびやかな、湿っぽい空間で見せられるメニュー。その中に、自己主張をしているメロンソーダの文字。エメラルドグリーンといきたいところだけど、ただの安っぽい緑色。そんな地味な色ではあるけれど、特定の条件下でのその色は、誰もが街で振り返る美女の次くらいに艶かしい。メロンソーダを頼むと、大体こんな話に発展する。

「メロンソーダ飲むの？ そんな人初めて見たよ」ビールだと予想していた女の子が、怪訝さを通り越して本当に驚く。

「あまり飲む機会がないからね。せっかくだから、飲みたいなと思ってね」僕が冷静に答える。そして、こう続ける。

「むかし、缶ジュースにあったんだけどね、いつの間になくなってしまった」

「でも、たまにクリームソーダの缶ジュースが売・・・」

「あれはメロンソーダじゃないよ。クリームの味がするからね」女の子が言い終わる前に牽制球を投げる。どうでもいい話ではあるけれど、なるほど、という感じで考えてしまう女の子。しかし、唐突に何かを思いついたようだ。

「そうだ。そういえばこの前ファミレスで友達がメロンソーダ飲んでたよ。ドリンクバーにはあるよね」友達がメロンソーダを飲んだことを、誇らしそうに自慢してくる女の子。友達思いで微笑ましい。

「そうだね、ファミレスにはあるね。あれってどこから仕入れてるんだろう？」ここでややトーンが変わる。たぶん空気を読めない言葉だとは思う。どこから仕入れているのだろうか？僕は分からない。味はFメロンだから、某C社なのかもしれない。女の子は真剣に仕入先を考えている。

トントントン。

「あ、来たみたい。楽しみだね」

僕のメロンソーダなのに、まるで自分のメロンソーダのようという女の子は、年齢や容姿やスタイルに関係なく、無条件にかわいいと思う。これはメロンソーダのサブリミナルなのだろうか？ジュースの成分に、中毒性のある何かが入っているのだろうか？それとも昔飲んでたノスタルジー？

僕のメロンソーダを、なぜかいっしょに飲むふたり。すっかり打ち解けて、恋人気分になった。もちろん、そう思っているのは僕だけで、話を合わせるテクニックなのかもしれない。でも、クリームソーダの例を出したことで、友達がファミレスで飲んだ例を出したことは、おそらくテクニックではなく素の彼女が出た可能性が高い。犬好きに悪い人がいないように、メロンソーダ好きにも悪い人はいないのだ。

女の子からメロンソーダを受け取り、僕は残りを飲み干す。思ったよりも残りが少ないから、氷もひとつ噛み砕いて食べる。

(さあ、はじめようか)

捉え方によっては、いかがわしい話に聞こえるかもしれないが、これは僕がメロンソーダを大好きだということを伝えたい話だ。単なるメタファーの世界。ただ、これを書きながら僕が飲んでいるのはビールだ。この話を書いた僕に対する、わずかばかりの皮肉なのかもしれない。

「なんかメロンの味がするね」

メロンソーダは、メロンシロップとは違って舌が緑色にならないけど、そんな女の子の舌は、とても甘酸っぱい味がした。メロンソーダよりもちょっとだけ、この女の子が好きになったかもしれない。